

開催地名	熊本県 八代市
開催日時	令和6年11月9日(土)10:00~11:30
開催場所	鏡文化センター
語り部	齋藤 朝子(埼玉県川島町)
参加者	一般市民、自主防災組織、防災士等 100名
開催経緯	本市では、市民に防災・減災対策の重要性を周知するとともに更なる防災意識の高揚を図るため、2019年から「やつしろ防災フェスタ」を開催している。(2020年、2021年は新型コロナウイルスの影響により中止) 今回は、同イベントにおいて防災セミナーを実施し、子育て世帯に向けての防災知識の普及啓発を目的に、「大切な子どもを守る我が家の防災」について講話いただいた。
内容	■はじめに 講演者の齋藤朝子氏は、埼玉県の特別支援学校の教員として長年教育に携わり、防災活動にも精力的に取り組んできた。特に、障がいを持つ子どもたちの防災教育やその家族・支援者向けの防災学習会、特別支援学校と地域や行政、企業らが共に取り組む防災イベントを開催してきた。本講演では、齋藤氏が小さな子どもを持つ家庭が日常生活「イツモ」の中でも取り組める防災「モンモ」について語った。防災を単なる個人の備えではなく、地域、子育て仲間と取り組むことで、楽しみながら共に取り組むことができるコツについても紹介した。 ■我が家の防災対策 子育て家庭では家事や育児に追われて1日が終わってしまうことは、齋藤氏も4人の子どもがおり、経験している。昨今災害のニュースを聞くたびに防災について漠然とした不安があると思うが、日々の忙しさで後回しになりなかなか対策を取ることができないことも仕方がないことである。それでも家庭内での備えとして、最初に考えるのはインターネットやテレビで紹介されている防災グッズを買い揃える、という人が多いと思う。一般的な防災セットがあれば本当に安心なのか？自宅や子どもたちの通う園や学校、親の職場等で被災したら？という漠然とした不安をそのままにしないため、子どもたちを守るための防災対策を3つの視点で提案する。 ■戦う前に相手を知ろう 備え、と一言で言っても相手を知らなければ始まらない。この場合の相手は、自分の住む場(ここでは熊本県八代市周辺)である。10月に開催されたぼうさいこくたいでも熊本県のブースで展示されていた様子などを紹介しながら起こりうる災害について挙げている。 八代市における災害の種類 ● 地震:布田川・日奈久断層の活動による大規模な揺れの可能性。 ● 津波:沿岸部では最大 5m 以上の浸水リスク。 ● 水害:球磨川の氾濫による広範囲な浸水。 ● 土砂災害:八代市の山間部で集中しやすい。 ハザードマップの活用 ● 市町村が発表する地震・津波・水害・土砂災害のハザードマップを確認する。 ● 「重ねるハザードマップ」などのオンラインツールで、自宅や職場のリスクをチェック。 アプリを活用して災害を疑似体験し、イメージする ● スマートフォンで被害想定が算出できるアプリを活用し、自宅や園・学校・職場などのライフラインの被害想定を知る。それにより何を備えればいいのかが見えてくる。 ● お天気アプリのAR(拡張現実)を使って実際の場所での浸水の高さをイメージする。 ● 室内の被害想定を確認し、家具の配置や避難方法を検討する。 情報収集と早めの避難 ● 避難情報に関するガイドラインが改定されていて避難に時間を要する小さい子どものいるご家庭は避難レベル3で避難を開始する。 ● 「まだ大丈夫」だと思っているとあっという間に身動きがとれなくなる事例を紹介。高層マンションは浸水しなくても籠城になる可能性もある。くまもとマイタイムラインの紹介。 ● 八代市の防災アプリの活用の他、おススメの防災アプリの紹介。 ■家族で楽しみながら備えよう 災害時の連絡手段 ● 災害用伝言板や災害伝言ダイヤル171、SNS、公衆電話など複数の連絡手段を用意する。 ● 171のメッセージは30秒以内に。「あ・い・た・い・よ」のキーワードでスムーズに連絡する。 食の工夫 特に小さい子どもは非常食など食べ慣れないものに対する拒否もあるので、非常食を用意する場合は、事前に食べて見て好みを把握しておくことが必要である。日常「イツモ」の生活で使いながら無理なく「モンモ」の災害に備えていくことを提案した。 ● 齋藤氏が実際に体験した防災セットの非常食や支給されたレトルト食品でのハプニング。 ● あのお菓子で？意外で簡単な調理！子どもと一緒に作ってみよう。

	● 乾燥粉末野菜や常温保存可能な食品を活用し、栄養バランスを意識しよう。 ● インスタント食品、フリーズドライ食品、レトルト食品などを常温保存可能な形で備える。 ● アレルギー対応食品や乳幼児・高齢者向けの食品も考慮し、家族の構成に合わせて準備。 ● カセットコンロの活用やポリ袋調理など、災害時に役立つ調理法を覚えておく。 防災を身近なものに ● 「普段のお出かけは避難訓練に繋がる」でものあり、子連れのお出かけバックは最低限の持ち出し袋である。そこに「モシモ」の観点を加えた防災ポーチを加え、フェーズフリーとして普段から使うものにしていく。 ● 小さい子どもは危険なものから身を守ることが難しい場合もあるため、自宅内を安全にするために「落ちない・倒れない・移動しない・割れない」環境作りを意識し、家具や棚を固定することが大切である。その際に玄関までの動線を確認しながら、緊急時でもスムーズに移動できる配置にする。 ● 「ダンゴムシのポーズ」は必殺技ではないことを地震マットを使った動画で紹介。 ● 「くまもとマイタイムライン」を作成し、避難のタイミングを「防災スイッチ」として家族で共有。 ■周りを巻き込んで一緒に！ 地域やコミュニティとの連携 ● 地域のデイキャンプやイベントに防災の視点を取り入れる。コミュニケーションから防災が始まるので、地域でできることから一緒に始めていく。 ● 齋藤氏の以前の勤務校で10年間実施した防災イベントの効果や継続の工夫について紹介。 自分に合った防災のスタイル ● 「料理が好き」「アウトドア好き」「DIY が得意」など、それぞれのライフスタイルに合わせた防災対策を提案。 ■まとめ 齋藤氏は、災害時の対応をより円滑に行うために、以下の点が重要であると語った。 防災への入り口は様々である。それぞれの興味あるところに防災の視点を加えてもらえると取り組みやすくなる。大切なのは一人で行うのではなく、仲間を増やすこと。同じ立場の人もいれば他の立場の人もいて、色々な視点の人が集まることで誰でも安心して住みやすい街になっていくだろう。難しく考えてしまうこともあると思うが、楽しみながらやれるといい。そして自宅に帰ったら、今日聞いた話の中からまず何かを始めてほしい。それがはじめの一步になるから、と締めくくった。
開催地より	気象情報をはじめとする防災情報の入手方法や、家庭での防災対策等について具体的な内容で分かりやすくお話いただいた。 今後も、このようなセミナーや啓発活動等を通じて、市民の災害に対する備えと防災意識の向上について取組を推進していきたい。